

パート I. 葛藤の舞台設定

1 章 神の国の始まり

イントロダクション

1. 聖書の概略を読み解くためには、いくつかの方法がある。
 - (1) 諸契約を基に、神の計画の歴史的進展を読み解く方法
①聖書を字義通りに読めば、8つの聖書的契約が存在することが分かる。
 - (2) 神の経綸の移行に注目しながら、聖書を読み解く方法
①神の経綸は、一般的にディスペンセーションと呼ばれている。
②聖書には、明確に区分可能な7つのディスペンセーションがある。
 - (3) 神の国と悪魔の国の葛藤というテーマを軸に、聖書を理解する方法
①本シリーズは、(3)の方法で聖書の概略を読み解こうとするものである。
2. 本シリーズの目次
パート I. 葛藤の舞台設定
パート II. 旧約時代
パート III. 中間時代
パート IV. 新約時代
パート V. 公認教会の時代
パート VI. ルネサンスと宗教改革の時代
パート VII. 近代における背教の時代
パート VIII. 自由主義神学の時代
パート IX. グローバリズムの時代
パート X. 神の国の完成
3. 「1 章 神の国の始まり」のアウトライン
 - (1) 個人的証し
 - (2) キリスト教とは、世界観であり歴史観である。
 - (3) 聖書の神は、無から有を創造する神である。

神の国の始まりについて学ぶ

I. 個人的証し

1. クリスマンになる前の私は、無神論者であった。
 - (1) 今の自分の存在は、進化の積み重ねによって出来たと思っていた。
①生命の存在原因について、進化論しか教えられていなかった。
②人間は、偶然の積み重ねの産物であると信じて疑うことがなかった。

1 章 神の国の始まり

(2) 大学に入学した直後から、人生の根源的な問いに悩まされるようになった。

①「人はどこから来て、どこへ行こうとしているのか」

②「人はなぜ生きているのか」

③特に、死への恐怖は人一倍強かったように思う。

2. 2 年生になったとき、自らの人生観を揺さぶられるようなことが起った。

(1) 学生寮で同室になった下級生がクリスチャンであった。

①彼の誘いもあり、教会に定期的に通うようになった。

②今から思うと、神の摂理以外の何ものでもない。

(2) 約 2 年の求道生活を経て、クリスチャンになった。

①その結果、死の恐れから解放された。

②これは、心に起こった顕著な変化であった。

(3) とは言え、すべての問題が解決したわけではなかった。

①それまで深く考えることのなかった新たな疑問が湧いてきた。

②「神が愛なら、なぜこの世に悪が存在するのか」

③「聖書が示す人生のゴールとはなんなのか」

④「クリスチャンとして、いかに生きるべきか」

⑤聖書には、必ず答えがある。そう思いながら、聖書の学びを続けた。

II. キリスト教とは、世界観であり歴史観である。

1. 聖書には、明確な歴史哲学が啓示されている。

(1) 歴史哲学とは、歴史を読み解く原則のことである。

①その原則を用いれば、さまざまな歴史上の出来事の説明が可能となる。

(2) いつ、なぜ、どのようにして起こったのかを、説明できるようになる。

①世界の存在

②死の存在

③悪の存在

④死刑制度の存在

⑤多言語の存在

⑥諸民族の存在

⑦イスラエル人の存在

⑧反ユダヤ主義の存在

⑨キリスト教会の存在

⑩ローマ・カトリック教会の存在

⑪イスラム教の存在

⑫プロテスタント教会の存在

1 章 神の国の始まり

⑬ホロコーストの悲劇

⑭近代イスラエル国家の復興

2. 聖書の歴史哲学の主要テーマのひとつが、「神の国と悪魔の国の葛藤」である。

(1) 「神の国」とは、光の国である。

① 「神の国」とは、「神の王国」(Kingdom of God) である。

(2) 「悪魔の国」とは、闇の国である。

① 「悪魔の国」とは、「悪魔の王国」(Kingdom of the Devil) である。

(3) 聖書によれば、歴史とは、この 2 つの王国の葛藤の記録でもある。

III. 無から有を創造する神

1. 聖書の歴史哲学の土台になるのが、無から有を創造する神の存在である。

(1) 神はなぜ、天地を創造し、人間を創造されたのか。

(2) 「孤独だったので、愛の対象として人間を創造した」というのは誤りである。

① 神は、永遠の昔から、三位一体の神として（父、子、聖霊という 3 つの位格において）存在しておられる。

② 神は、完全に自己充足し、自己完結したお方である。

(3) 天地創造の前には、神以外のいかなるものも存在しなかった。

① これは、神を理解する際に極めて重要な情報である。

2. パウロによる神の定義

(1) 1 テモ 1 : 17

1Ti 1:17 どうか、世々の王、すなわち、朽ちることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

① 神は、「世々の王」（永遠の王）(the King eternal) である。

② 神は、朽ちることなく、目に見えない唯一の神である。

* 神は、不変である（時間に支配されていない）。

* 神は、物質界を超越した霊的存在である。

(2) 神は、永遠の昔に、御自身が王として統治する「神の国」を造ろうとされた。

(3) 「王国」が存在するためには、次の 3 つの要素がなければならない。

① 王の存在

② 王国を統治するための権威

③ 臣民の存在

3. 天地創造の目的は、神の国の臣民を造り出すことにあった。

(1) 最初に創造されたのが、天使たちである。

1 章 神の国の始まり

(2) 天使は霊的存在であり、知性を有する（マタ 22：30、ヘブ 1：13～14）。

①コミュニケーション能力が、与えられている。

②天に住むように創造されたが、地に下ることも許された。

③天使たちの間には、権威や能力に関する序列が存在する。

(3) 天使の数に関しての明確な啓示はないが、ヒントになる聖句はある。

①ダニ 7：10

Dan 7:10 火の流れがこの方の前から出ていた。／幾千もの者がこの方に仕え、／幾万もの者がその前に立っていた。／さばきが始まり、／いくつかの文書が開かれた。

②ヘブ 12：22

Heb 12:22 しかし、あなたがたが近づいているのは、シオンの山、生ける神の都である天上のエルサレム、無数の御使いたちの喜びの集い、

③黙 5：11

Rev 5:11 また私は見た。そして御座と生き物と長老たちの周りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の数万倍、千の数千倍であった。

(4) 次に、神の国の臣民として創造されたのが、人間である。

4. 人間には、重要な役割が与えられた。

(1) 神の代理人としての役割

①時代劇によく登場する役職に、「代官」というものがある。

②代官とは、主君（領主）の代理人として領地に派遣され、その地の管理事務を司る者のことである。

③代官には、主君に対する説明責任がある。

(2) 神が人間を創造したのは、地球という領地に代理人を置き、管理させるため。

①当然のことながら、人間には神への説明責任が伴う。

②神が代理人を通して地上を管理する統治形態を、神政政治と呼ぶ。

(3) 重要な聖句

①創 2：7

Gen 2:7 神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。

*地上の体が与えられたのは、領地をより良く理解するためである。

②創 1：26～27

Gen 1:26 神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」

Gen 1:27 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。

1 章 神の国の始まり

*「神のかたち」に創造されたのは、神とのコミュニケーションのため。

*「かたち」は、ヘブル語で「ツェレム」である。

*その意味は、偶像、彫像、似姿（幻で見る形）、などである。

*外面的な「かたち」は、以下のようなものである。

- ・言葉を使用する。
- ・顔に表情がある。
- ・恥を感じることができる（顔が赤くなる）。
- ・自然界を支配する能力がある。

*内面的な「かたち」は、以下のようなものである。

- ・知性、感情、意志
- ・霊性

結論

1. 人間の創造によって、神の国を設立するための神の御業は完了した。

- (1) 人間は創造の冠として、最後に造られた。
- (2) 人間の尊厳の根拠は、「神のかたち」に創造されているという点にある。

2. 被造世界を見て、神は「非常に良かった」と評価された。

- (1) 創 1 : 31

Gen 1:31 神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六日。

- (2) 物質は決して悪ではない。

3. 「非常に良かった」被造世界が、なぜ呪われた世界となったのか。

- (1) 聖書の歴史哲学は、その理由を明らかにする。
- (2) その理由は、神の国と悪魔の国の葛藤にある。

4. 聖書は、将来に希望をもたらす書である。

- (1) 被造世界は、「非常に良かった」という状態で始まった。
- (2) 現在の被造世界は、呪われた状態にある。
- (3) しかし、被造世界は、再び元の状態に戻る。いや、それ以上の状態になる。
- (4) クリスマスが楽観主義者である理由は、そこにある。

パート I. 葛藤の舞台設定

2 章 悪魔の国の始まり

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマを軸に、聖書の解説を試みようとしている。
(1) 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマは、聖書の歴史哲学の中心である。

2. 本シリーズの目次

パート I. 葛藤の舞台設定

1 章 「神の国の始まり」

2 章 「悪魔の国の始まり」

パート II. 旧約時代

パート III. 中間時代

パート IV. 新約時代

パート V. 公認教会の時代

パート VI. ルネサンスと宗教改革の時代

パート VII. 近代における背教の時代

パート VIII. 自由主義神学の時代

パート IX. グローバリズムの時代

パート X. 神の国の完成

3. 2 章のアウトライン

- (1) サタン（悪魔）の野望
- (2) サタンによる天的領域の支配
- (3) サタンによる地上的領域の支配

悪魔の国の始まりについて学ぶ

I. サタン（悪魔）の野望

1. 悪魔の国の王であるサタンとは何者なのか。

- (1) 黙 20 : 2

Rev 20:2 彼は、竜、すなわち、悪魔でありサタンである古い蛇を捕らえて、これを千年の間縛り、

- (2) 悪魔に関して 4 種類の言葉が出て来る。

① 竜（ドラゴン）

② 蛇（オフィス）

③ 悪魔（ディアボロス）。「誤った証拠をもって責めてくる者」という意味。

④サタン（サタナス）。これも同じく「糾弾する者」という意味である。

*聖書は悪魔を竜や蛇にたとえたり、悪魔やサタンと呼んだりしている。

(3) かつてサタンは、神によって創造された最高位の天使のひとりであった。

①彼は、自らの力と美を過信し、自分も神のようになりたいと思った。

②イザ 14 : 12~14、エゼ 28 : 11~17、1 テモ 3 : 6

(4) 墮落する前のサタン

①「守護者ケルブ」と呼ばれていた。

②「全きものの典型」であり、「知恵に満ち、美の極みであった」。

③エデンに置かれ、9つの宝石が彼を覆っていた。

*大祭司の胸当ての12の宝石と対比されるものである(出 28:17~20)。

④恐らく彼には、天の聖所において、祭司的役割を与えられていたであろう。

2. サタンは、神に反抗し、自らが支配する王国を造ろうとした。

(1) その結果、「守護者ケルブ」が、サタン（敵対者）と呼ばれるようになった。

(2) しかし、サタンには神のように無から有を創造する力はなかった。

①彼は、創造主ではなく、被造物である。

②彼が採り得る唯一の方法は、神が創造した「神の国の臣民」を誘惑し、「悪魔の国の臣民」に作り替えることだけである。

(3) サタンはこの作業を2段階で行った。

①天的領域を支配するために、天使たちを誘惑した。

②地上的領域を支配するために、人間を誘惑した。

II. サタンによる天的領域の支配

1. サタンは、天的領域を支配するために天使たちを誘惑した。

(1) 黙 12 : 4

Rev 12:4 その尾は天の星の三分の一を引き寄せて、それらを地に投げ落とした。また竜は、子を産もうとしている女の前に立ち、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。

①天の星とは、天使のことである。

②サタンは、神について嘘を吹聴し、天使の3分の1を自分の側に付けた。

③その結果、天使の3分の1がサタンに従い、墮落した。

④これらの墮天使たちは、悪霊と呼ばれるようになった。

2. サタンは、悪霊どもを組織化し、戦略的に神の国とその臣民たちを攻撃し始めた。

(1) 今やサタンは、「悪霊どものかしら」(マタ 12 : 24~26) と呼ばれている。

(2) また、「空中の権威を持つ支配者」(エペ 2 : 2) として暗躍している。

Eph 2:1 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、

Eph 2:2 かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。

3. 信者は霊的戦いに勝利するために、「**神のすべての武具を身に着け**」必要がある。

Eph 6:11 悪魔の策略に対して堅く立つことができるように、神のすべての武具を身に着けなさい。

4. 天使の 3 分の 1 は墮落したが、残りの 3 分の 2 は墮落しなかった。

(1) 彼らは、神に忠実な神の国の臣民たちである。

①「**聖なる御使いたち**」(マコ 8:38)

②「**選ばれた御使いたち**」(1 テモ 5:21)

(2) 神による天的領域の支配は、これらの天使たちを臣下として今も続いている。

III. サタンによる地上的領域の支配

1. 次にサタンは、地上的領域を支配するために、人間を誘惑して墮落させた。

(1) 創 3:1~5

Gen 3:1 さて蛇は、神である【主】が造られた野の生き物のうちで、ほかのどれよりも賢かった。蛇は女に言った。「園の木のどれからも食べてはならないと、神は本当に言われたのですか。」

Gen 3:2 女は蛇に言った。「私たちは園の木の実を食べてもよいのです。」

Gen 3:3 しかし、園の中央にある木の实については、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ』と神は仰せられました。」

Gen 3:4 すると、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。」

Gen 3:5 それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」

2. サタンは蛇を通して、先ずエバを墮落させ、次にアダムも墮落させた。

(1) サタンの誘惑の中心は、次の言葉に集約される。

「**あなたがたは決して死にません。それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです**」

(2) サタンは、「神のようになろう」という野望を抱いたので墮落した。

①イザ 14:12~14

(3) 人間もまた、同じ野望を抱いたために誘惑に乗り、墮落した。

3. 神への反抗（墮落）は、いくつかの悲劇的な結果をもたらした。

(1) 人間は、罪を犯した瞬間に霊的に死んだ（創 2：16～17）。

①霊的死とは、神との関係の断絶のことである。

②それまで人間の内側には、「神を慕い求める性質」があったが、その性質が変質し、人間は神に敵対するようになった。

③パウロは、ロマ 8：7 でこう書いている。

Rom 8:7 なぜなら、肉の思いは神に敵対するからです。それは神の律法に従いません。いや、従うことができないのです。

④神に敵対する性質のことを、神学的には「全的墮落」という。

(2) 人間は、すぐに肉体の死を迎えたわけではないが、墮落した瞬間から、死に至る劣化のプロセスが始まった。

①人間は病気だけでなく、事故、災害、暴力などによっても死ぬようになった。

Rom 5:12 こういうわけで、ちょうど一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がったのと同様に――

(3) 神の代理人（代官）として地上を管理する特権に、変化が生じた。

①サタンが「この世の神」（2 コリ 4：4）となった。

②人間は、神の御心に沿って地上を統治するのではなく、自然界を搾取するようになった。

③さらに、人間の墮落は自然界にのろいをもたらした（創 3：17～18）。

④ロマ 8：19～22

Rom 8:19 被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。

Rom 8:20 被造物が虚無に服したのは、自分の意志からではなく、服従させた方によるものなので、彼らには望みがあるのです。

Rom 8:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。

Rom 8:22 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。

(4) 人間は、神の国の臣民から、悪魔の国の臣民になった。

①アダムが神に反抗した結果、アダムの子孫たちはすべて（キリストを除いて）、霊的に死んだ状態で、神に敵対する性質を宿して誕生するようになった。

②生まれながらの人間は、新しい生まれ変わりを経験しない限り、悪魔の支配に従って生きることしかできないのである。

③新しい生まれ変わりとはい、霊的新生体験のことである。

④エペ 2：2

Eph 2:2 かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。

⑤サタンの嘘を信じ、霊的闇の中を歩いている人間は、やがてサタンと同じ裁

きを受けることになる（黙 20 : 10、15）。

(5) サタンは、「この世を支配する者」となった（ヨハ 12 : 31、14 : 30、16 : 11）。

①それゆえサタンはキリストに、次のような提案をすることができた。

Luk 4:5 すると悪魔はイエスを高いところに連れて行き、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せて、

Luk 4:6 こう言った。「このような、国々の権力と栄光をすべてあなたにあげよう。それは私に任されていて、だれでも私が望む人にあげるのだから。

Luk 4:7 だから、もしあなたが私の前にひれ伏すなら、すべてがあなたのものとなる。」

結論

1. ここまでの段階では、サタンは、神の国を破壊し、悪魔の国を造るという当初からの目的をある程度達成したかに見える。

(1) 彼は、天的領域と地上的領域に、自らが支配する国を造った。

(2) 墮落した人間は、サタンの目的に従って利用される存在となった。

2. かつては愛と恵みに富んだ神の支配下にあった人間が、神が創造した素晴らしい被造世界を破壊することしか考えないサタンの支配下に入った。

(1) 人間がサタンの嘘に惑わされて重大な失敗を犯したことは、明白である。

3. 神は、直ちにサタンを粉砕することもできたはずであるが、そうはしなかった。

(1) 神は、墮落した人間を愛し、彼らを救おうとされた。

(2) 神は、天地創造の前から人間を救う計画を立てておられた。

(3) 今後私たちは、神の国と悪魔の国の葛藤がどのように進展していくのかを学ぶことになる。

4. 聖書は、最後は神の国の勝利で終わることを約束している。

パート I. 葛藤の舞台設定

3 章 原福音

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマを軸に、聖書の解説を試みようとしている。
 - (1) 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマは、聖書の歴史哲学の中心である。
2. パート I. 葛藤の舞台設定 (1～3 章)
 - 1 章 神の国の始まり
 - 2 章 悪魔の国の始まり
 - 3 章 原福音
3. ここまでの復習
 - (1) サタンは、悪魔の国を造るという目的をある程度達成したかに見える。
 - ①彼は、天的領域と地上的領域に、自らが支配する国を造った。
 - ②墮落した人間は、サタンの目的に従って利用されるだけの存在となった。
 - (2) 神は、直ちにサタンを滅ぼすこともできたが、そうはしなかった。
 - ①神は、天地創造の前から人間を救う計画を立てておられた。
 - ②神は、墮落した人間を愛し、彼らを救おうとされた。
 - (3) この章では、神が人間に与えた福音の原型について学ぶ。
 - ①これを原福音と呼ぶ。
4. アウトライン
 - (1) 被造世界の回復
 - (2) それ以外のものの回復
 - (3) 原福音

救い主の約束について学ぶ。

I. 被造世界の回復

1. 神の国と悪魔の国の葛藤の本質
 - (1) これは、対等な二者による戦いではない（二元論ではない）。
 - ①被造物であるサタンが、神に挑戦しているのが、この葛藤の本質である。
 - ②神がこの戦いに勝てないとしたら、神はサタン以下の存在になってしまう。
 - ③最終的には、神はサタンを打ち破り、ご自身の計画をすべて成就される。
 - ④その時、神の栄光が完全に現れる。
 - ⑤そういう意味で、聖書が書かれた目的は、神の栄光であると言える。

(2) この戦いは、天と地において行われる。

①エペ 6 : 10～12

Eph 6:10 終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。

Eph 6:11 悪魔の策略に対して堅く立つことができるように、神のすべての武具を身に着けなさい。

Eph 6:12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。

②黙 12 : 7～8

Rev 12:7 さて、天に戦いが起こって、ミカエルとその御使いたちは竜と戦った。竜とその使いたちも戦ったが、

Rev 12:8 勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。

2. 聖書が啓示する戦いは、主に地上における戦いである。

(1) 聖書は人間に対する啓示の書である。

①とは言え、天における戦いが存在しないわけではない。

(2) 地上における戦いのゴールは、被造世界の回復である。

①アダムの墮落によって、被造世界はのろわれた。

*悪魔が、神が創造した世界を破壊したとも言える。

②被造世界の回復とは、エデンの園の状態の回復である。

③被造世界が回復されたとき、神の栄光が現れる。

(3) 被造世界の回復について、旧約聖書の預言者たちは数々の預言を語っている。

①旧約聖書の預言のピークは、御国の成就である。

②その先の出来事（新天新地）に関する預言はない。

③御国は、地上において成就する必要がある。

④そうでなければ、神は被造世界を修復できなかったことになる。

⑤使 3 : 21

Act 3:21 このイエスは、神が昔からその聖なる預言者たちの口を通して語られた、万物が改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。

*「万物が改まる時」とは、御国が成就する時である。

*御国とは、「メシア的王国」（千年王国）のことである。

*主イエスの再臨によって、地上に御国が成就する。

II. それ以外のものの回復

1. 御国（千年王国）が成就する前に、いくつかのものが回復される。

(1) 霊的死からの復活

- ①人間は、霊的に死んでしまった（神との断絶）。
- ②その人間に新しい命を与えるのは、聖霊の御業である。
- ③これは、「新生」「霊的生まれ変わり」などと呼ばれるものである。
- ④さらに、人間に、神を愛し、神を慕い求める性質を与える必要がある。
- ⑤これは、聖霊の内住によって可能になる。
- ⑥聖霊に満たされた人は、神の御心を喜んで行うようになる。
- ⑦その人は、悪魔の国の市民から、神の国の市民に移された人である。
- ⑧ロマ 8 : 13

Rom 8:13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬこととなります。しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きます。

(2) 肉体的死からの復活

- ①人間は肉体的にも死ぬ運命になった。
- ②神が行う命の回復は、霊的命だけでなく、肉体的命も含む。
 - *これは、肉体的死からの復活である。
- ③人間は、復活の体をもって御国で生きようになる。
- ④イエス・キリストの復活は、聖徒の復活の初穂であり、保証である。

(3) 地と労働の回復

- ①アダムは墮落によって、地がのろわれ、労働がのろわれた。
- ②サタンは、「地を統治する権威」をアダムから略奪した。
- ③この状態は、神が最初に意図したものとは異なる。
- ④神は、地と人間の間を元の状態に回復される。
- ⑤人間は、神が意図した通りに地を管理するようになる。
 - *このことが成就するのは、御国（千年王国）においてである。

(4) サタンの追放

- ①神はサタンを裁き、地上から追放される。
- ②この追放は、御国が成就する前に、歴史の流れの中で行われる必要がある。
- ③サタンは歴史の中で神に反抗したので、その決着は歴史の中でつけられる。

III. 原福音

1. 神は、アダムとエバに救い主の約束を与えた。

- (1) その約束を与えたタイミングは、サタンが地の支配権を略奪した直後である。

①創 3 : 14～15

Gen 3:14 神である【主】は蛇に言われた。／「おまえは、このようなことをしたので、／
どんな家畜よりも、／どんな野の生き物よりもものろわれる。／おまえは腹這いで動き回り、
／一生、ちりを食べることになる。

Gen 3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間に、／おまえの子孫と女の子孫の間に置く。／
彼はおまえの頭を打ち、／おまえは彼のかかとを打つ。」

(2) エデン契約からアダム契約への移行

- ①アダムが墮落したとき、神との最初の契約（エデン契約）が破棄された。
- ②そこで神は、アダムと新しい別の契約を結ばれた（アダム契約）。
- ③アダム契約は、4 つの部分に分かれている（語りかける相手が 4 種類いる）。
- ④ここでは、第 1 と第 2 の部分を取り上げる。

2. 第 1 の部分：蛇に対する宣言（創 3 : 14）

(1) 蛇にのろいが下った。

- ①蛇がサタンに悪用されたからである。
- ②アダムの罪によって、動物界全般がのろわれた。
- ③その中で、蛇は、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりもものろわれた。
- ④腹這いで歩くのは、のろいが下った証拠である。
 - *「ちりを食べる」とは、のろわれた状態や敗北した状態を表している。
 - *詩篇 72 : 9、イザヤ 49 : 23 参照

3. 第 2 の部分：サタンに対する宣言（創 3 : 15）

(1) サタンに対して裁きが宣言された。

- ①その内容は、「原福音」（福音の原型）と呼ばれる極めて重要なものである。
- ②神は、「女の子孫」を通して贖いの計画を実行される。

(2) 創 3 : 15

- ①神は、サタンと女の間に敵意を置かれる。
- ②女に対して敵意を置く理由は、人類の救い主が女から誕生するからである。
- ③サタンはそれを妨害しようとして、人間の女たちを汚そうとする。
 - *創 6 : 1～4 の記事（墮天使と人間の娘の雑婚）
- ④「おまえの子孫」とは、反キリストのことである。
- ⑤系図は普通男性のラインを辿るが、メシアは「女の子孫」と呼ばれている。
 - *「女の子孫」という言葉は、最初のメシア預言である。
- ⑥メシアがそう呼ばれる理由は、イザ 7 : 14 になって初めて明かされる。

Isa 7:14 それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。

*イザヤは、メシアが処女降誕によって登場することを預言した。

⑦「サタンの子孫」である反キリストも超自然的な誕生を経験することになる。

*その詳細は、ダニ 9:26～27 になって明らかにされる。

Dan 9:26 その六十二週の後、／油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。／次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。／その終わりには洪水が伴い、／戦いの終わりまで荒廃が定められている。

Dan 9:27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、／半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。／忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」

*「次に来る君主」とは、反キリストのことである。

*「君主の民」とは、神殿を破壊する民、つまりローマ人のことである。

*反キリストは、ある時点で、ローマ系の婦人から誕生する。

⑧メシアは、サタンの頭を踏み砕く。

*これは、イエスの復活によって部分的に成就した（ヘブ 2:14～18）。

⑨サタンの完全な敗北は、将来起こる出来事である。

*ロマ 16:20

Rom 16:20 平和の神は、速やかに、あなたがたの足の下でサタンを踏み砕いてくださいます。／どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。

*黙 20:10

Rev 20:10 彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。

⑩サタンは、イエスのかかとを打つ。

*かかとかみつかるのは痛い、致命的なことではない。

*イエスの十字架の死は、サタンがかかとかみついた出来事である。

結論

1. 今後、女の子孫の登場を軸に、神の国と悪魔の国の葛藤を追いかけることになる。
2. この葛藤の最終ゴールは、御国である。
3. 御国というテーマは、神の国と悪魔の国の葛藤の冒頭から意識すべきものである。
4. 御国の理解なくして、聖書の歴史哲学を理解することは不可能である。
5. 無千年王国説は、聖書の歴史哲学を理解するための助けとはならない。

パート II. 旧約時代

4 章 カインとアベル

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマは、聖書の歴史哲学の中心である。
 - (1) 今私たちは、このテーマを基に聖書を読み解く作業を行っている。
2. パート I. 葛藤の舞台設定 (1～3 章) の復習
 - (1) サタンは、悪魔の国を造るという目的をある程度達成したかに見える。
 - (2) 神は、直ちにサタンを滅ぼすこともできたが、そうはしなかった。
 - (3) 神は、創世記 3 章 15 節で福音の原型を示された。
3. パート II. 旧約時代 (4～17 章)
 - 4 章 カインとアベル
4. アウトライン
 - (1) 最初の殺人者カイン
 - (2) セツの誕生
 - (3) エノシュの誕生
 - (4) 墮天使と人間の娘の雑婚

カインとアベルについて学ぶ。

I. 最初の殺人者カイン

1. 女から誕生する人物の誰かが、「女の子孫」であり贖い主である。
 - (1) サタンは「女の子孫」の出現を大いに恐れた。
 - ①その人物が現れたなら、サタンの野望は打ち砕かれてしまう。
 - ②そこでサタンは、女から誕生する人物の抹殺を計画した。
 - ③旧約聖書は、サタンによるメシア到来の妨害の記録として読める。
 - (2) アダムとエバに 2 人の息子が与えられた。
 - ①カインとアベルがそれである。
 - ②成長するに従って、2 人の性質が明らかになってきた。
 - *兄のカインは、神に対して反抗的な性質を持っていた。
 - *弟のアベルは、神を慕い求める性質を持っていた。
 - ③アダムとエバは、アベルこそ「女の子孫」だと思ったことだろう。

2. サタンは「女の子孫」を抹殺するために行動を起こした。

- ①サタンは、アベルは「女の子孫」そのものではないかと考えた。
- ②あるいは、「女の子孫」を輩出する家系に連なる人物ではないかと考えた。
- ③そこでサタンは、神に反抗的なカインを用いてアベルを抹殺しようとした。
- ⑤ヨハネの福音書 8 章 44 節

Joh 8:44 あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと思っています。悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。彼のうちには真理がないからです。悪魔は、偽りを言うとき、自分の本性から話します。なぜなら彼は偽り者、また偽りの父だからです。

3. カインとアベルの対比（創 4 章）

(1) 共通点

- ①彼らはともに罪人であった。
- ②ともに、人類の墮落後、エデンの園の外で生まれた。
- ③ともに同じ両親から生まれ、同じ環境で育てられた。

(2) 相違点

- ①カインのささげ物は、信仰によるものではなかった。
- ②アベルのささげ物は、血のささげ物であった。
- ③「しばらく時が過ぎて」（創 4：3）とある。
 - *その間、人口が増加した。
 - *神からささげ物に関する啓示があった。
 - *アベルのささげ物は、この啓示に応答する信仰に基づいたもの。

(3) 創世記 4 章の段階で、人間の前には 2 つの道が開けていたことが分かる。

- ①カインの道（神に反抗する道）とアベルの道（神に従う道）

(4) 最初の殺人

- ①カインは、アベルを人目につかない所に誘い、そこで彼を殺した。
- ②これは、人類史上最初の殺人であり、兄弟殺しである。
- ③新約聖書では、アベルの死は「義人の死」と解説されている。
 - *マタ 23：35、ルカ 11：51、1 ヨハ 3：12
- ④神はカインに、「あなたの弟アベルは、どこにいるのか」と問われた。
 - *これは、罪の告白を導き出すための質問である。
- ⑤カインは、「私は知りません」と答えた。
 - *これは、人間が嘘をついた最初の事例である。

⑥カインは、「私は弟の番人なのではないでしょうか」と応じた。

*彼は、神の質問は的を射たものではないと反論している。

(5) サタンは、アベル殺害によって、「女の子孫」の到来を阻止しようとした。

①それに対する神からの対抗策は、セツの誕生である。

II. セツの誕生

1. 創世記 4 章 25 節

Gen 4:25 アダムは再び妻を知った。彼女は男の子を産み、その子をセツと名づけた。カインがアベルを殺したので、彼女は「神が、アベルの代わりに別の子孫を私に授けてくださいました」と言った。

(1) セツは、アベルの代わりとしてアダムとエバに与えられた息子である。

①セツには、「定める」、「土台」などの意味がある。

②アダムとエバは、セツからメシアを輩出する家系が始まると考えた。

③「別の子孫」は、ヘブル語では「別の種」ということばである。

*「種（ゼラー）」は「女の子孫」の「子孫」と同じことばである。

(2) この段階でのエバの理解

①アベルに代わる息子が与えられた。

②その息子は、「女の子孫」を輩出する家系の始まりとなる。

③エバは霊的に成長し、神の計画をより深く理解するようになっていた。

III. エノシュの誕生

1. 創世記 4 章 26 節

Gen 4:26 セツにもまた、男の子が生まれた。セツは彼の名をエノシュと呼んだ。そのころ、人々は【主】の名を呼ぶことを始めた。

(1) セツにも男の子が生まれた。彼はその子をエノシュと名づけた。

①エノシュには、「朽ちる人」という意味がある。

②セツは、人間存在のはかなさや限界を理解した人であった。

③詩篇 103 篇 15 節

Psa 103:15 人 その一生は草のよう。／人は咲く。野の花のように。

(2) そのころ、人々は【主】の名を呼ぶことを始めた。

①これは、定期的な公の礼拝が始まったという意味である。

②セツの家系に属する人たちの中に、霊的覚醒が起こったことが分かる。

③これは、サタンにとっては歓迎できない状況であった。

IV. 墮天使と人間の娘の雑婚

1. 別の戦略

(1) 「女の子孫」を輩出する人物を殺しても、神は代わりの人物を立てるだろう。

- ①この戦略は無効なので、新しい戦略を考える必要がある。
- ②新しい戦略とは、神に反抗的なカインの子孫たちを大いに増すこと。
- ③彼らを通して、セツの子孫たちに悪影響を与えること。

(2) 創世記 4 章 16～22 節

Gen 4:16 カインは【主】の前から出て行って、エデンの東、ノデの地に住んだ。

Gen 4:17 カインはその妻を知った。彼女は身ごもってエノクを産んだ。カインは町を建てていたので、息子の名にちなんで、その町をエノクと名づけた。

Gen 4:18 エノクにはイラデが生まれた。イラデはメフヤエルを生み、メフヤエルはメトシヤエルを生み、メトシヤエルはレメクを生んだ。

Gen 4:19 レメクは二人の妻を迎えた。一人の名はアダ、もう一人の名はツィラであった。

Gen 4:20 アダはヤバルを産んだ。ヤバルは天幕に住む者、家畜を飼う者の先祖となった。

Gen 4:21 その弟の名はユバルであった。彼は竖琴と笛を奏でるすべての者の先祖となった。

Gen 4:22 一方、ツィラはトバル・カインを産んだ。彼は青銅と鉄のあらゆる道具を造る者であった。トバル・カインの妹はナアマであった。

- ①カインの子孫たちは、先進的な文明を築き始めた。
- ②その文明は、神に敵対的であり、一夫多妻と暴力を特徴としていた。

(3) 創世記 4 章 23～24 節

Gen 4:23 レメクは妻たちに言った。／「アダとツィラよ、私の声を聞け。／レメクの妻たちよ、私の言うことに耳を傾けよ。／私は一人の男を、私が受ける傷のために殺す。／一人の子どもを、私が受ける打ち傷のために。」

Gen 4:24 カインに七倍の復讐があるなら、／レメクには七十七倍。」

- ①アダムから 7 代目のレメクは、神に敵対的な文明の化身のような人物。
- ②彼は、人類史上初めて、ふたりの妻をめとった。
- ③妻の名は、アダ（装飾、飾るなどの意）とツィラ（きらきら輝くの意）。
*ともに、性的快楽を示唆した名前である。
- ④またレメクは、暴力的な人物であった。

(5) カインの子孫との交流により、セツの子孫の中に背教が広がっていった。

- ①これは由々しき事態であるが、サタンはさらに強烈な手を打った。

②それが、墮天使と人間の女の雑婚である。

2. 墮天使と人間の女との雑婚

(1) 創世記 6 章 1～2 節

Gen 6:1 さて、人が大地の面に増え始め、娘たちが彼らに生まれたとき、

Gen 6:2 神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、それぞれ自分が選んだ者を妻とした。

①これは、墮天使と人間の娘の雑婚の記録である。

②「神の子ら」（ベネイ・ハエロヒム）ということば

*ヘブル語聖書では、常に天使を指す（良い天使も墮天使も指す）。

*ヨブ 1:6、2:1、38:7 参照

③新約聖書では、「神の子」は天使以外のものも指す。

*アダムや信者

*イエス・キリストもまた「神の子」である。

*イエスの場合は「そのひとり子」と呼ばれる。

*それは、イエスが永遠に存在していることを示している。

④墮天使と人間の娘の雑婚という解釈は、昔からあるユダヤ人の解釈である。

⑤ユダヤ人の歴史家ヨセフスの「ユダヤ古代史」（紀元 173 年）

*「神の子ら」（ベネイ・ハエロヒム）を「天使」と解釈している。

⑥「人の娘たち」とは、人間の女のことである。

*この中には、カインの系列の女も、セツの系列の女も含まれている。

⑦墮天使たちは、「それぞれ自分が選んだ者を妻とした」。

*これは、墮天使と人間の雑婚を表している。

(2) なぜサタンは、墮天使と人間の女の雑婚という策略を採用したのか。

①人間の女の中にある「神のかたち」を破壊するためである。

②異常な人間を誕生させ、「女の子孫」の誕生を妨害しようとした。

結論

1. サタンは、アベルを殺し、「女の子孫」の家系を断ち切ろうとした。
2. しかし神は、アベルに代わる人物として、セツを誕生させた。
3. セツにエノシュという息子が誕生した。
4. セツーエノシュという家系は、霊的覚醒を体験する信仰者の家系である。
5. カインの子孫は、神に敵対する文明を築いていった。
6. サタンは、人間の「かたち」を歪めるために、墮天使を人間の娘の雑婚を推進した。
7. これは「女の子孫」の誕生を阻止するためにサタンの策略である。
8. それに対する神の対抗策は、地球を覆う大洪水である。

パートⅡ. 旧約時代
5 章 大洪水

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマを基に聖書を読み解く作業を行っている。
2. パートⅠ. 葛藤の舞台設定 (1～3 章)
 - (1) サタンは、悪魔の国を造るという目的をある程度達成したかに見える。
 - (2) 神は、直ちにサタンを滅ぼすこともできたが、そうはしなかった。
 - (3) 神は、創世記 3 章 15 節で福音の原型を示された。
3. パートⅡ. 旧約時代 (4～17 章)
 - 4 章 カインとアベル
 - (1) サタンは、墮天使と人間の娘の雑婚を推進した。
 - (2) これは「女の子孫」の誕生を阻止するための策略である。
 - (3) 神の対抗策は、地球を覆う大洪水である。
 - 5 章 大洪水
4. アウトライン
 - (1) 人の悪の増大
 - (2) 箱舟の建造
 - (3) 大洪水
 - (4) 神の守り

大洪水について学ぶ。

I. 人の悪の増大

1. 大洪水が起る直前の地上の状態は、どのようなものであったか。

(1) 創 6 : 5

Gen 6:5 【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。

(2) 創 6 : 11～12

Gen 6:11 地は神の前に墮落し、地は暴虐で満ちていた。

Gen 6:12 神が地をご覧になると、見よ、それは墮落していた。すべての肉なるものが、地上で自分の道を乱していたからである。

2. サタンは、セツの家系から「女の子孫」が誕生することを阻止しようとした。

(1) カインの家系とセツの家系を接触させる。

①セツの家系に悪影響を与え、その信仰を破壊する。

(2) 墮天使たちに人間の女たちと結婚させる。

①人間の女には、カインの家系もセツの家系も含まれる。

②この雑婚の目的は、異常な人間を誕生させることである。

③その結果、「ネフィリム」と呼ばれる存在が誕生した。

(3) マタ 22 : 30 から、天使は結婚するのかという疑問が生じる。

Mat 22:30 復活の時には人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。

①この聖句は、良い天使たちの関するものである。

②墮天使たち（悪霊たち）は、人の娘と結婚する。

3. 人類が墮落して行くのを見て、神は大いに悲しまれた。

(1) 創 6 : 6~7

Gen 6:6 それで【主】は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。

Gen 6:7 そして【主】は言われた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜や這うもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを悔やむ。」

①神は、人類を破滅から救おうとされた。

II. 箱舟の建造

1. 神は、サタンの悪影響を受けない 1 人の信仰者を残しておられた。

(1) ノアは、セツの家系に属する人物である。

①彼は、時代の圧力（この世の価値観）に抗し、神に従順な生活を続けた。

②神は、ノアと 3 人の息子たちを通して新しい人類の歴史を作ろうとされた。

2. ノアの時代に大洪水が襲った理由が、2 つ考えられる。

(1) 人類の罪を裁くための方法として、洪水が用いられた。

①この洪水は、局地的なものではなく、地球全体を覆うものである。

(2) ノアとその一家が悪影響を受ける前に、罪人たちを地上から取り去るため。

①「女の子孫」の家系をサタンの攻撃から守るための反撃策である。

3. 神はノアに、箱舟を造るように命じた。

(1) 箱舟は、原語では「テイバー」である。

①これは、ヘブル語ではなく、エジプト語から借用したものである。

- ②その意味は、船ではなく、箱である。
- ③赤子のモーセが入れられた籠もまた「テイバー」である。
- ④ノアの箱舟と、モーセの籠には、類似点がある。
- ⑤溺死から守られた者には、他の人に救いをもたらす使命がある。
- ⑥モーセは、イスラエルに解放をもたらすために救われた。
- ⑦ノアもまた、人類に救いをもたらすために救われたのである。

(2) 箱舟のサイズ

- ①長さが 300 キュビト (135m)
- ②幅が 50 キュビト (22.5m)
- ③高さが 30 キュビト (13.5m)
- ④広さに換算すると、 $135 \times 22.5 = 3,037.5 \text{ m}^2$ 、およそ 920 坪。
- ⑤3 階建てなので、総床面積は 2,760 坪にもなる。
- ⑥船のサイズに換算すると、排水トン数 4 万 3,000 トンになる。
- ⑦米国の鉄道で使用している家畜運搬車両 550 両に匹敵するサイズである。
- ⑧羊なら、この箱舟に 13 万頭も入れることができる。
- ⑨種類が知られている動物たちをすべて入れたとしても、3 万 5 千～7 万頭。
- ⑩この箱舟は、航行することではなく、浮ぶことだけが目的の建造物である。
- ⑪この構造なら、仮に 90 度近く傾いたとしても、元に戻る。

(3) 神から、すべての動物を 2 匹ずつ入れるようにという命令が下った。

- ①鳥、動物、地をはうものが、種類に従って、集められた。
- ②神が超自然的に働かれたので、動物たちは自分からノアのところに来た。
- ③箱舟に入った動物が 7 万 5,000 種類いたとしても、60%しか埋まらない。
- ④40%のスペースは、昆虫、食物、居住空間などのために用いることができる。

(4) 最後に、ノアと 3 人の息子たちが箱舟に入った。

- ①それぞれに妻がいたので、合計 8 人である。

III. 大洪水

1. 神からの語りかけがあってから 7 日後に雨が降り始めた (7 日間の準備期間)。

(1) これは、人類史上初めての雨である。

- ①この雨の目的は、すべての生き物を地の面から消し去るためであった。
- ②雨は、40 日 40 夜降り続けた。

2. この洪水は、ある地域だけを襲ったものではない。

- (1) もしそうなら、人間も動物も、高い地域に避難できたはずである。
 - ①もしこれが地域的な洪水なら、大規模な箱舟を造る必要はなかった。
 - ②また、あらゆる種類の動物を集める必要もなかった。
- (2) 水が引くまでに要した時間を考えても、これは普遍的な洪水である。
 - ①水は、150 日間、地の上に増え続けた。
 - ②また、地が乾くまでにさらに 221 日かかった。
- (3) 神は、2 度と洪水をもたらさないと約束されたが、地域的な洪水は今も起きている。
 - ①普遍的な洪水を前提にしなければ、神の約束は成就していないことになる。
 - ②現在の人類は、ノアの 3 人の息子から出ている。
 - ③これもまた、普遍的洪水を前提とした説明である。

IV. 神の守り

- 1. 大洪水が襲って来ても、箱舟の中だけは安全であった。

- (1) 箱舟の中が安全だった理由は、創 8 : 1 に出て来る。

Gen 8:1 神は、ノアと、彼とともに箱舟の中にいた、すべての獣およびすべての家畜を覚えておられた。神は地の上に風を吹き渡らせた。すると水は引き始めた。

- ①「覚えておられた」とは、単に「忘れていない」ということではない。
 - ②これは、心に留めている対象に対する「行動」を指すことばである。
 - ③神は、箱舟の中の人間と動物を守るために、行動を起こされたということ。
 - ④さらにこのことばは、契約関係を前提として語られることばである。

- (2) ノア契約はまだ結ばれていないが、その預言は創 6 : 18 で与えられていた。

Gen 6:18 しかし、わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは、息子たち、妻、それに息子たちの妻とともに箱舟に入りなさい。

- (3) 箱舟は、アララテ山の上に留まった。

- ①つまり、水位が相当下がったということである。
 - ②アララテ山の標高は、5,000 メートル以上もある。
 - ③箱舟は、山の頂上ではなく、山麓のどこかに留まったのであろう。

- (4) いよいよ、ノアと 3 人の息子たちから新しい人類の歴史が始まる。

- ①「女の子孫」の誕生を妨害しようとしたサタンの策略は、再び神によって粉碎されたのだ。

パート II. 旧約時代

6 章 バベルの塔

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。
2. パート I. 葛藤の舞台設定 (1～3 章)
 - (1) サタンは、悪魔の国を造るという目的を達成したかに見えた。
 - (2) 神は、直ちにサタンを滅ぼすこともできたが、そうはしなかった。
 - (3) 神は、創世記 3 章 15 節で福音の原型を示された。
3. パート II. 旧約時代 (4～17 章)
 - 4 章 カインとアベル
 - 5 章 大洪水
 - (1) サタンは、墮天使と人間の娘の雑婚を推進した。
 - (2) これは「女の子孫」の誕生を阻止するための策略である。
 - (3) 神の対抗策は、地球を覆う大洪水である。
 - 6 章 バベルの塔
 - (1) 大洪水後の人類の反抗
4. アウトライン
 - (1) ノア契約
 - (2) ノアの 3 人の息子たち
 - (3) バベルの塔事件

大洪水後の世界について学ぶ。

I. ノア契約

1. 大洪水後、新しい人類の歴史が始まる。
 - (1) 大洪水によって、悪魔の国に属する人々は、全員滅びた。
 - ①彼らは、箱舟に入らなかった人々である。
 - (2) 神は、ノアの家族 8 人から新しい人類の歴史を作ろうとされた。
 - ①ノアと 3 人の息子たち、それぞれの妻、合計 8 人。
 - ②人類にやり直しのチャンスが与えられた。
 - ③箱舟から出たノアは、家族を【主】への礼拝へと導いた (創 8 : 20)。

Gen 8:20 ノアは【主】のために祭壇を築き、すべてのきよい家畜から、また、すべてのき

よい鳥からいくつかを取って、祭壇の上で全焼のささげ物を献げた。

2. 洪水後に神がノアと結んだ契約を、ノア契約と言う（創 9：1～17）。

(1) ノア契約では、ノアは第 2 のアダムとしての位置づけにある。

①アダムから人類の歴史が始まった。

②洪水後は、ノアから人類の歴史が始まる。

(2) 神は、ノアとその息子たちに、「生めよ。増えよ。地に満ちよ」と言われた。

①アダムに与えられた命令（エデン契約）と同じものである（創 1：28）。

Gen 1:28 神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」

(3) 特筆すべきは、死刑制度の創設である（創 9：6）。

Gen 9:6 人の血を流す者は、／人によって血を流される。／神は人を神のかたちとして／造ったからである。

①神は、カインを放置したことが人類に悪影響を与えたと判断された。

②死刑を認める理由は、「神のかたち」に造られた人間を殺すことは、重罪に当たるからである。

③合法的に死刑を執行するためには、人間政府の存在が必要となる。

④死刑制度と人間政府は、人類の墮落傾向に歯止めをかけるための神の方法。

⑤また、悪魔の国が広がることを阻止するための神の新しい戦略である。

⑥この点を、パウロはロマ書 13 章で論じている（ロマ 13：1～6 参照）。

(4) ノア契約のしるしは、虹である（創 9：8～17）。

①虹は、英語では「レインボウ」で、直訳すると、「雨の弓」となる。

②ヘブル語で虹のことを「ケシェット」と言う。

③戦いのための弓（武器）を指すことばで、英語の「レインボウ」と似ている。

④虹を見たのは、人類の歴史上ノアが最初である。

⑤彼は、雲の中に出ている虹を見て、神の契約が真実であることを確認した。

⑥虹は、「神が戦いの弓を雲の中に置き、それを平和のしるしとされた」ということを象徴している。

⑦ノア契約は、今も有効である（無条件契約。破棄されることなく続いている）。

⑧虹が示していること

* 神は真実なお方である。

* 人類を滅亡させるような地球規模の大洪水は起こらない。

II. ノアの 3 人の息子たち

1. 全人類は、ノアの 3 人の息子たちから地上に拡がることになった。

(1) 彼らの名前は、誕生順に、セム、ハム、ヤフェテと言う。

(2) ある時ノアは、3 人の息子たちの将来について預言を語った (創 9:25~27)。

Gen 9:25 彼は言った。／「カナンはのろわれよ。／兄たちの、しもべのしもべとなるように。」

Gen 9:26 また言った。／「ほむべきかな、セムの神、【主】。／カナンは彼らのしもべとなるように。」

Gen 9:27 神がヤフェテを広げ、／彼がセムの天幕に住むようになれ。／カナンは彼らのしもべとなるように。」

①最も祝福されているのは、セムである。

②これは、女の子孫（メシア）がセムの家系から出ることを示唆している。

③これは、悪魔にとっては、聞き捨てならない重要な情報である。

④女の子孫は、ノア→セム→アルパクシャデ→シェラフ→エバル（ヘブル人の父祖）→ペレグ→レウ→セルグ→ナホル→テラ→アブラムという家系から出て来る。

2. 人類史のこの段階では、全人類は同じルーツを持っていた。

(1) 世界の現状は、「人類の調和」より「民族間の対立」の方がより顕著である。

(2) なぜ地上には、さまざまな言語があり、さまざまな民族が存在しているのか。

(3) その原因は、「バベルの塔事件」にある。

III. バベルの塔事件

1. この事件の本質は、ニムロデが指導者となって起した神への反抗である。

(1) ノア契約の中で神は、全地に拡がるように命じておられた。

(2) 人々はその命令に反して、同じ場所に集まって住むようになった。

①悪魔の視点からは、人間が一箇所に集まっている方が管理し易い。

②また、悪の影響も短時間で拡散する。

(3) 人々は、アララテ地方（アルメニアとトルコ）からシヌアルの地へ移動した。

①シヌアルの地とは、バビロンのことである。

②彼らは、耕作に適した地を見つけ、そこに定住した。

③全人類は同一言語を用いていた。

④大プロジェクトを容易に実行することができた。

- ⑤シヌアルの地に定住した人々は、レンガを作って、建材として利用した。
- ⑥さらに、モルタルの代わりに瀝青（アスファルト）を用いるようになった。

(4) しばらくすると、彼らはこう言い始めた（創 11：4）。

Gen 11:4 彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」

- ①バベルということばの意味は、「神の門」である。
- ②「天に届く塔」を建てようとした理由は、占星術を行うためである。
 - *彼らは、神の領域に届こうとしたのである。
 - *ここには、誤った宗教の原型がある。
- ③この塔は、新しい宗教を創設する目的で建てられたものである。
- ④その指導者であるニムロデは、バビロンの主神であるマルドゥクになった。
 - *マルドゥクは、メロダクやベルと呼ばれている（エレ 50：2）。
- ⑤人々は、「名をあげよう」という野望を抱いた。
- ⑥野望は、人間中心主義、傲慢、プライドなどから出てくる根本的な罪である。
- ⑦人々が塔を建てた理由は、神が与える領土区分を拒絶し、自らの計画でそれを選ぼうとしたことにある。

2. 神の裁き

(1) 創 11：5

Gen 11:5 そのとき【主】は、人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた。

- ①擬人法を用いて神の行動とを、風刺（皮肉）的に表現している。
- ②神は人類の状態に関心を持っておられるが、人類は余りにも小さい存在。
- ③いかに高い塔を建てたとしても、神は、それを見るために降りて来なければならない。
- ④人が神の高みに届くことは不可能。そう考えること自体が傲慢である。

(2) 神は、人類が悪事を企むのは、同一言語を話すからだと判断された。

- ①塔を建てたのは反抗の始まりに過ぎない。
- ②これを皮切りに、あらゆる種類の反抗が起こってくるに違いない。
- ③問題を解決するためには、ことばの混乱をもたらす必要がある。
- ④そこで神は、地上にことばの混乱をもたらされた。

(3) ことばが通じなくなった人々は、言語グループごとに散らされて行った。

- ①これが、多言語と多民族が誕生した経緯である。
- ②「バベル」という名前の背後には、ことば遊びがある。

- ③「散らす」という意味と「神の門」という意味がある。
- ④さらに、「バラル（混乱させる）」ということばとも似ている。
- ⑤「バベル」は、「神の門」が「混乱の門」になったことを示している。

まとめ

- (1) この段階で、人類は誤った宗教を作り出した。
- (2) また、道徳的墮落も際限なく進むようになった（ロマ 1 : 18～32 参照）。
- (3) 神の国に対する悪魔の攻撃が、効果を発揮しているかのように見え始めた。
- (4) 神の対抗策は、アブラムの召しである。

パート II. 旧約時代

7 章 アブラハム契約

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。
2. パート I. 葛藤の舞台設定 (1～3 章)
 - (1) サタンは、悪魔の国を造るという目的を達成したかに見えた。
 - (2) 神は、直ちにサタンを滅ぼすこともできたが、そうはしなかった。
 - (3) 神は、創世記 3 章 15 節で福音の原型を示された。
3. パート II. 旧約時代 (4～17 章)
 - 4 章 カインとアベル
 - 5 章 大洪水
 - (1) サタンは、墮天使と人間の娘の雑婚を推進した。
 - (2) 神の対抗策は、地球を覆う大洪水である。
 - 6 章 バベルの塔
 - (1) 大洪水後の人類の反抗
 - 7 章 アブラハム契約
4. アウトライン
 - (1) アブラハム契約の内容
 - (2) アブラハム契約への攻撃
 - (3) アブラハム契約の継承
 - (4) アブラハム契約の歴史的進展

アブラハム契約について学ぶ。

I. アブラハム契約の内容

1. 神は、新たな対抗策を用意した。
 - (1) バベルの塔事件で、人類の道徳的墮落は歯止めが効かない状態になった。
 - ①悪魔の国の力が、優勢になり始めたように見える。
 - ②しかし神は、新たな対抗策を用意しておられた。
 - ③それがアブラハム契約である。
 - (2) 神の対抗策は、アブラハムの召しという形を取って現れた。
 - ①神は、アブラハムから新たな民族を作り出そうとされた。

- ②地上の諸民族は墮落したので、新たな民族を産み出す必要性があった。
- ③女の子孫（メシア）は、アブラハムの子孫から誕生する。
- ④6 章「バベルの塔」では、女の子孫はセムの家系から出ることを確認した。
- ⑤アブラハムは、セムの家系に属する人物である。

2. アブラハムの召命は、契約の形を取ってやってきた。

- (1) 聖書の神は、契約を結ぶ神である。

①私たちは、この神概念をユダヤ人から教わった。

- (2) 創 12 : 1～3

Gen 12:1 【主】はアブラムに言われた。／「あなたは、あなたの土地、／あなたの親族、あなたの父の家を離れて、／わたしが示す地へ行きなさい。

Gen 12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、／あなたを祝福し、／あなたの名を大いなるものとする。／あなたは祝福となりなさい。

Gen 12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、／あなたを呪う者をのろう。／地のすべての部族は、／あなたによって祝福される。」

- (3) 3 つの条項と 1 つの付帯条項

①アブラハムに土地が約束された。

*遊牧民であった彼にとっては、夢のような約束である。

②彼は大いなる国民となる。

*これは、子孫の約束である。大いなる国民とはイスラエルの民を指す。

③アブラハムは神の祝福を受ける。

*彼の名は大いなるものとなる。

*地上のすべての民族がアブラハムを通して祝福される。

*アブラハムの子孫からメシアが誕生することを約束したものである。

④付帯条項が追加された。

*「アブラハムを祝福する者を祝福し、呪う者をのろう」

*この付帯条項は、悪魔の攻撃から契約の民を守るためのものである。

*アブラハム契約は今も有効なので、この付帯条項も生きている。

3. アブラハムの選びは、神の国を確立するための方法としての選びである。

- (1) 神は、サタンによって破壊された「神の国」の回復のために、彼を召された。

①アブラハムは、神の約束をそのまま信じ、カナンの地に向かった。

②彼は、その地にどういう危険と特徴があるのかを知らないで、出て行った。

II. アブラハム契約への攻撃

1. 激しいききんがカナンの地を襲った。

- (1) カナンの地に入った後、アブラハムの信仰が試された。
- (2) 彼は、ききんを逃れるためにエジプトに下る決心をする。
 - ①永住の意図はなく、一時的に寄留するだけという思いで行動を起こした。

2. 予想外の事件が起こった。

- (1) アブラハムは、異母妹であったサライを妹だと偽っていた。
 - ①エジプトの王ファラオが、サラを宮廷（ハーレム）に召し入れた。
- (2) この事件は、悪魔が作り出したものである。
 - ①悪魔は、アブラハム契約を攻撃しているのである。
 - ②サラがパロに奪われたなら、子孫の約束は成就しないことになる。
 - ③これは、神の計画に対するサタンの挑戦である。

3. 付帯条項が効力を発揮した。

- (1) 神は、パロとその家を災害で痛めつけた。
 - ①ユダヤ教の伝統では、この「災害」は重い皮膚病だとされている。
 - ②皮膚病のために、男女の交わりが不可能になったのである。
 - ③パロはアブラハムを殺さず、そのままエジプトから去らせた。
 - ④アブラハムは、以前よりも裕福になってカナンの地に戻って来た。
 - ⑤これでアブラハム契約は、子孫の約束の成就が可能な状態に戻った。
- (2) アブラハムの失敗によってアブラハム契約が破棄されることはない。
 - ①アブラハム契約は、無条件契約である。

III. アブラハム契約の継承

1. アブラハムからイサクへ、イサクからヤコブへ継承されて行く。

- (1) イスラエルの神は「アブラハム、イサク、ヤコブの神」である。
 - ①これは、契約の神の御名である。
 - ②イサクに対する契約の継承は、創世記 26 章に出てくる。
 - ③ヤコブに対する契約の継承は、創世記 28 章に出てくる。

- (2) 契約の継承に際しては、神の自己宣言に続いて、アブラハム契約の 3 つの条項の再確認がなされる。

- ①土地の約束

②子孫の約束

③祝福の約束

(3) 族長たちは全員、異邦人の救いの約束を神から受けていた。

①神は、イスラエルの選びを通して、全人類を救おうとされた。

IV. アブラハム契約の歴史的進展

1. カナン人との同化の危険性

(1) 夫に先立たれた嫁のタマルは、しゅうとのユダを欺いて子を残す（創 38 章）。

①ヤコブの息子たちの霊性（特にユダの霊性）は、極めて墮落していた。

②ヤコブの一家がこのままカナンの地に留まり続けるのは、危険である。

③カナン人と同化し、契約の民としての聖さも特徴も失ってしまう。

(2) 神はヤコブの一家をエジプトに移住させ、一大民族として育てようとした。

①エジプト移住は、神からの裁きである。

②と同時に、ヤコブの一家を守る恵みの手段でもある。

③ヨセフが売られたのは、一家がエジプトに移住するための準備であった。

2. ゴシェンの地での生活

(1) 契約の民は、ゴシェンの地でエジプト人から分離して一大民族として育った。

①イスラエルの民は、この世（カナン人）と分離する必要があった。

②分離のための分離ではなく、この世に出て行くための分離である。

③彼らの最終ゴールは、カナンの地への帰還である。

(2) 悪魔は、エジプトで拡大し続けるイスラエルの民を危険視し始めた。

①彼は、「女の子孫」（メシア）はこの民から誕生することを知っていた。

②そこで、エジプトの政治権力を用いて、イスラエルの民を抹殺しようとした。

③イスラエルの民を抹殺することが、アブラハム契約を破壊する道である。

* 次回は、エジプトでの反ユダヤ主義の拡がり、出エジプトの出来事について学ぶ。

パート II. 旧約時代

8 章 出エジプト

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。

- (1) この葛藤は、創世記 3 章以来続いているものである。
- (2) 今も、私たちはこの葛藤の中で生活している。
- (3) この葛藤は、黙示録 20 章と 21 章で終わる。

2. パート I. 葛藤の舞台設定 (1～3 章)

- (1) サタンは、悪魔の国を造るという目的を達成したかに見えた。
- (2) 神は、直ちにサタンを滅ぼすこともできたが、そうはしなかった。
- (3) 神は、創世記 3 章 15 節で福音の原型を示された (原福音)。

3. パート II. 旧約時代 (4～17 章)

4 章 カインとアベル

5 章 大洪水

6 章 バベルの塔

7 章 アブラハム契約

- ①ヤコブの息子たちの霊性 (特にユダの霊性) は、極めて墮落していた。
- ②ヤコブの一家がこのままカナン之地に留まり続けるのは、危険である。
- ③カナン人と同化し、契約の民としての聖さも特徴も失ってしまう。
- ④神は、ヤコブの一家をエジプトに移住させ、一大民族として育てようとした。
- ⑤移住は、裁きであると同時に、ヤコブの一家を守る恵みの手段でもあった。
- ⑥ヨセフが売られたのは、一家がエジプトに移住するための準備であった。
- ⑦契約の民は、ゴシェンでエジプト人から分離して一大民族として育った。
- ⑧彼らの最終ゴールは、カナン之地への帰還である。

8 章 出エジプト

4. アウトライン

- (1) エジプトの反ユダヤ主義
- (2) 解放者モーセの登場
- (3) 悪魔の妨害

出エジプトをめぐる神と悪魔の葛藤について学ぶ。

I. エジプトの反ユダヤ主義

1. 神は、契約の民をエジプトに移し替え、一大民族として育てようとされた。

(1) 居住地として選ばれたのは、ゴシェンの地であった。

- ① 牧畜に適した下エジプトの地
- ② エジプト文明の影響からイスラエルの民を隔離する地

(2) やがて民は、その地で増え広がった。

① 出 1 : 7

Exo 1:7 イスラエルの子らは多くの子を生んで、群れ広がり、増えて非常に強くなった。
こうしてその地は彼らで満ちた。

2. 悪魔は、エジプトで拡大し続けるイスラエルの民を危険視した。

(1) 悪魔は、「女の子孫」(メシア)がこの民から誕生することを知っていた。

- ① 悪魔は、エジプトの政治権力を用いて、イスラエルの民への攻撃を開始する。
- ② エジプトは、史上初めて反ユダヤ主義を政策として採用する国となった。
- ③ 悪魔の手先となったのが、エジプトの王ファラオである。

* ファラオは、物事の本質が見えない哀れな存在である。

* 自分が悪魔の策略に荷担していることを理解することができなかった。

④ 神を恐れず、自分が神であるかのように振る舞う者は、愚か者である。

(2) 反ユダヤ主義の本質

- ① 契約の民を滅ぼすための悪魔の策略である。
- ② さまざまに形を変えて、今日まで続いている。
- ③ イスラエルの民を抹殺することで、神の計画を妨害しようとする。

3. ファラオは、3段階の方法で、契約の民を抹殺しようとした。

(1) 奴隷として酷使する段階

- ① 苦しめれば苦しめるほど、民はますます増え広がった。
- ② その結果、エジプトたちはイスラエル人に恐怖を抱くようになった。

(2) 男子の新生児を殺害する段階

- ① ファラオは、男子の新生児の殺害をヘブル人の助産婦たちに命じた。
- ② 神を恐れる助産婦たちは、それを実行しなかった。

(3) 男子の新生児をナイル川に遺棄する段階

- ① ヘブル人の家に生まれた子が男児なら、ナイル川に遺棄せよと命じた。
- ② しかし神は、幼子モーセを守られた。

II. 解放者モーセの登場

1. 悪魔の策略を打ち破る神の対抗策は、モーセの誕生であった。

(1) 幼子モーセは、パロの娘によってナイル川から引き上げられた。

①王宮で王子としての教育を受けた。

(2) モーセの 120 年の生涯は、各 40 年に 3 区分することができる。

①最初の 40 年は、エジプトの帝王学を身に付ける期間であった。

*彼は、自力でヘブル人を救済しようとしたが、ものの見事に失敗した。

②次の 40 年は、荒野で羊飼いととしての経験を積む期間であった。

*出エジプトのリーダーとなるべく神から実践的な訓練を受けた。

③最後の 40 年は、契約の民をカナンに連れ上る働きをする期間であった。

*モーセの生涯は、80 歳から 120 歳までの期間が最も輝いていた。

2. 神は、モーセを通してエジプトの上に 10 の裁きを下された。

(1) それらはすべて、エジプトの偶像の上に下る裁きであった。

(2) 特に熾烈だったのは、第 10 の裁き（最後の裁き）である。

①エジプトの地のすべての初子が、奴隷や家畜に至るまで打たれた。

②さらに、ファラオの初子も打たれた。

③ファラオは、最高位の神であり、初子はその地位を継承する後継者である。

④イスラエルの神がエジプトの神々に勝利したということを表わしている。

(3) 裁きの天使がエジプト中の家々を巡った。

①しかし、イスラエル人の家だけは過ぎ越した。

②鴨居と門柱に、身代わりとなる過越の子羊の血が塗られていたからである。

③これが、過越の祭りの起源である。

④今もイスラエル人たちは、この祭りを最も重要な祭りとしている。

(4) ファラオは、イスラエルの民に直ちにエジプトを出るように命じた。

①カナンの地に向けての旅は、容易なものではなかった。

②悪魔は、あらゆる機会を捉えて、民を攻撃し、挫折させようとした。

III. 悪魔の妨害

1. 悪魔は、パロに心変わりを促し、イスラエルの民を滅ぼそうとした。

(1) パロは豹変し、エジプトを出たイスラエルの民の後を追いかけた。

- ①戦車部隊は、イスラエルの民を紅海の岸に追い詰めた。
- ②悪魔は、勝利を確信したことであろう。

(2) しかし、神は悪魔の策略を粉碎された。

- ①紅海の水が真っ二つに割れ、真ん中に乾いた地が現れた。
- ②イスラエルの民は、そこを歩いて向こう岸に渡って行った。
- ③同じことをしようとしたエジプトの戦車部隊は、全員溺死した。

2. 悪魔は、水不足によってイスラエルの民を滅ぼそうとした。

(1) 最初の 3 日間、民には水がなかった。

- ①ようやく水のある場所に来たが、その水は苦くて飲むことができなかった。
- ②落胆した民は、モーセに対してつぶやいた。
- ③モーセが神に祈ると、神は彼に 1 本の木を示された。
- ④それを水に投げ入れると、水は浄化された。
- ⑤神はまたもや悪魔の妨害を退けられたのである。

3. 悪魔は、飢餓によってイスラエルの民を滅ぼそうとした。

(1) 神は、うずらの肉を与え、天からのパンであるマナを降らせた。

- ①この場合も、神が悪魔に勝利されたのである。
- ②マナは、イエス・キリストの型である。

4. 悪魔は、再度水不足で民を滅ぼそうとした。

(1) しかし神は、ある岩（岩盤）を示し、モーセに杖で打たせた。

- ①すると、岩から水が出た（出 17 章）。
- ②水を出した岩は、イエス・キリストの型である。
- ③打たれたキリスト（岩）から聖霊（水）が豊かに流れ出るようになる。

5. 悪魔は、アマレク人を用いて、イスラエルの民を滅ぼそうとした。

(1) アマレク人は、先手を取って攻撃を仕掛けてきた。

- ①攻撃方法は、最後部の者（落後者）たちから切り倒して行くというもの。
- ②イスラエルの民がエジプトから持って来た富を略奪しようとした。
- ③イスラエルにとっては最初の戦いとなった。
- ④イスラエルは、誕生したばかりの若い国で、戦争経験がなかった。
- ⑤実践経験がなかったので、人間的には勝ち目のない戦いであった。

(2) しかしイスラエルの民は、祈りの力によってこの戦いに勝利した。

- ①モーセは丘の頂に立って祈った。
- ②モーセの手を両側から支えたのが、アロンとフルある。
- ③アマレク人との戦いにおいても、神は勝利されたのである。

* 神は、悪魔の攻撃をことごとく退けられた。

* イスラエルの民が問うべき質問は、2 つある。

(1) 自分たちに対する神の御心は何か。

①この質問に対する答えは、モーセの律法の中にある。

(2) どのようにして神を礼拝すればよいのか。

①この質問に対する答えは、幕屋建設の中にある。

* 次回は、モーセの律法と幕屋を取り上げる。

パート II. 旧約時代

9 章 律法と幕屋

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。
 - (1) この葛藤は、創世記 3 章以来続いているものである。
 - (2) この葛藤は、黙示録 20～21 章で終わる。
2. パート I. 葛藤の舞台設定 (1～3 章)
 - (1) 神は、人類を臣民とする神の国を造ろうとされた。
 - (2) サタンは、悪魔の国を作り、自らが王になろうとした。
 - (3) 神は、創世記 3 章 15 節で対抗策を啓示された (原福音)。
3. パート II. 旧約時代 (4～17 章)
 - 4 章 カインとアベル
 - 5 章 大洪水
 - 6 章 バベルの塔
 - 7 章 アブラハム契約
 - ①神は、アブラハムとその子孫を用いて、全人類を救おうとされた。
 - ②契約の民は、カナン人との同化を避けるために、エジプトに下った。
 - ③契約の民は、ゴシェンでエジプト人から分離して一大民族として育った。
 - ④彼らの使命は、カナンの地で神の栄光を表わすことである。
 - 8 章 出エジプト
 - 9 章 律法と幕屋
 - ①これからどのように生きれば良いのか。
 - * この質問に対する回答は、モーセの律法の中にある。
 - * モーセの律法は、シナイ契約の条項である。
 - ②これからどのように神を礼拝すればよいのか。
 - * この質問に対する回答は、幕屋の中にある。
 - * 幕屋は、神に近づくための仕掛けである。
 - ③悪魔の策略
 - * イスラエルの民を誘惑し、律法に違反するように仕向ける。
 - * 神の忍耐を試す。
4. アウトライン
 - (1) 律法の役割

(2) 幕屋の役割

(3) 神の忍耐

律法と幕屋をめぐる神の国と悪魔の国の葛藤について学ぶ。

I. 律法の役割

1. 神は、イスラエルの民とシナイ契約を結ばれた。

(1) モーセの律法は、シナイ契約の条項である。

①モーセの律法には、613 の命令がある。

②律法が与えられた目的は、民の生活を正しい方向に導くためである。

③律法には、民の弱点（背教）にブレーキを掛けるという目的がある。

④メシアが誕生する家系を清く保つことが、最優先課題である。

(2) 律法の時代は、出エジプト 19 : 1 から使徒 1 章の終わりまで続く。

①この時代、イスラエルの民は、律法に従うように命じられていた。

②1 つでも破ったなら、律法全体を破ったことになる（ヤコ 2 : 10）。

③モーセのような預言者が登場したなら、その方を信じることも期待された。

* 申 18 : 15～19

2. 結果的には、民は律法を守ることに失敗した（ロマ 10 : 1～3）。

(1) 彼らは、自らの義を立てようとして、抜け道を作った。

①ラビたちが作り出した口伝律法がそれである。

②また彼らは、旧約時代の預言者たちに従わなかった。

③さらに、イエスをメシアとして受け入れることもしなかった。

(2) イスラエルの民の不信仰に対する裁きは、複数ある。

①アッシリア捕囚

②バビロン捕囚

③エルサレム陥落と世界への離散（紀元 70 年）

④患難期（ヤコブの苦しみの日）

3. 神の裁きは、イスラエルの民を悔い改めに導くためのものである。

(1) 患難期の最後に、イスラエルの民族的救いが成就する。

II. 幕屋の役割

1. モーセが山頂で神のことばを受けている間に、麓では異変が起きていた。

(1) 金の子牛事件

- ①民は、モーセが手間取っていると感じた。
- ②神が民に必要なものを与えておられる間に、民の心は神から離れて行った。
- ③神の時を待つことができず、自分の計画に走った。

(2) 民は、自らの手で、自分たちを守り導いてくれる神を造り出そうとした。

- ①アロンは、金の耳輪（エジプトから受け取った品）を集めさせた。
- ②それを用いて金の子牛を作った。明らかな律法違反である。
- ③民は、偶像礼拝のためには犠牲をいとわなかった。
- ④彼らは、出来上がった金の子牛の周りで歌い踊った。

(3) 神は激怒し、イスラエルの民を滅ぼそうとされた。

- ①モーセの執りなしの祈りがなかったなら、民は抹殺されていた。
- ②神は、モーセの祈りに答えて怒りを静められた。

2. 金の子牛事件の後、幕屋を制作するようにという命令が与えられた。

(1) 幕屋は、神が聖であることを教えるための視聴覚教材である。

- ①民は、いけにえの動物や祭司たちを通して、神が聖であることを学んだ。
- ②また、聖と俗とを混同することは許されないということも学んだ。

(2) 罪人は、そのままの姿では神のもとに出ることができない。

- ①神に近づくためには、神が用意された方法によらなければならない。
- ②罪の赦しのためには、血の犠牲が必要である。
- ③幕屋は、そのことをイスラエルの民に教えた。

3. 幕屋が完成したとき、神はそれを認定し、そこをご自身の宿りの場とされた。

(1) シナイ山を覆っていた雲が地上に下り、幕屋を覆った。

- ①【主】の栄光が幕屋に満ちた。
- ②これは、幕屋の中（聖所と至聖所）に満ちた超自然の輝きである。
- ③これは、人間が直視することのできない光である。

(2) シャカイナグローリーが宿らないなら、幕屋は、ただの天幕に過ぎない。

- ①それと同じように、もし神と出会わないなら、聖書は単なる本である。
- ②信仰をもって読み始めると、神のことばであることが分かるようになる。
- ③出エジプトの出来事の目的は、イスラエルの民が神を知ることにあつた。
- ④神を体験的に知らなければ、約束の地は祝福の地とはならない。

(3) 旧約時代においては、幕屋は罪人が神に近づくための唯一の方法であった。

4. 新約時代になると、別の方法が啓示された。

(1) その方法は、幕屋が予表していたものである。

①幕屋全体が、メシアの型になっている。

(2) 神の子は、人間の間幕屋を張られた。

①これを受肉という。

②このお方の内に、シャカイナグローリーが宿った。

③このお方は、罪人のいる所まで下り、和解の道を開いてくださった。

④このお方は、すべての人が神に近づくことのできる道を開いてくださった。

⑤私たちは、このお方を通して父なる神に近づくことができる。

III. 神の忍耐

1. カデシュ・バルネア事件は、神の忍耐が試された事件である。

(1) 約束の地との国境に来た時、モーセは 12 人の斥候を派遣した。

①彼らは、40 日間その地を行き巡り、パランの荒野のカデシュに帰還した。

2. 相反する報告

(1) 10 人の報告は、自らの主観を交えた悲観的なものであった。

①そこは良い地であることは認めた。

②しかし、その地の住民は強力であると報告し、民の心をくじいた。

③彼らの報告は、不信仰と敗北主義に満ちたものであった。

④否定的なことばは、容易に集団全体に悪影響を及ぼす。

⑤不信仰の背後に、サタンがいることは言うまでもない。

(2) 2 人の報告は、積極的なものであった。

①エフンネの子カレブとヌンの子ヨシュア

②この 2 人は、民を鼓舞し、約束の地に入ることができると主張した。

3. 民の反応

(1) 約束の地で殺されるより、荒野で自然死を迎えたほうが良いとつぶやいた。

①ここで、神の忍耐が切れた。

(2) 神は、その通りにしようと宣言された。

①エジプトを出た世代の者は全員、荒野で死ぬようになる。

②しかし、カレブとヨシュアは、約束の地に入るようになる。

③さらに、20 歳以下の子どもたちも、そこに入るようになる。

(3) イスラエルの民は、荒野で 40 年間放浪することになった。

①40 年という期間は、斥候が行き巡った 40 日を基に決められた。

(4) これ以降、カデシュ・バルネアの出来事が繰り返し語られるようになる。

①この出来事は、回帰不能点を超えた典型的な例となった。

* 申 1 : 19～46、詩 95 : 10～11、106 : 24～27、アモ 2 : 10、5 : 25

* 1 コリ 10 : 5、ヘブ 3 : 7～4 : 13

②回帰不能点を越えたなら、いかに悔い改めても状況は変化しない。

(5) ヘブル 3 : 7～11

Heb 3:7 ですから、聖霊が言われるとおりです。／「今日、もし御声を聞くなら、

Heb 3:8 あなたがたの心を頑なにしてはならない。／荒野での試みの日に／神に逆らった
ときのように。

Heb 3:9 あなたがたの先祖はそこでわたしを試み、／わたしを試し、／四十年の間、わた
しのわざを見た。

Heb 3:10 だから、わたしはその世代に憤って言った。／『彼らは常に心が迷っている。／
彼らはわたしの道を知らない。』

Heb 3:11 わたしは怒りをもって誓った。／『彼らは決して、わたしの安息に入れない。』

①イスラエルの民は、イエスがメシアであることを否定した。

②その時点で、彼らは再び回帰不能点を越えた。

③その結果、紀元 70 年のローマ軍によるエルサレムと神殿の崩壊が訪れる。

④それ以降、イスラエルの民は世界に離散した民となる。

まとめ

1. 神の国と悪魔の国の戦いは、メシアを輩出するイスラエルの民を巡る戦いである。
2. 神はイスラエルの民の罪をその都度裁かれた。
3. しかし、悪魔が彼らを滅ぼすことはお許しにならなかった。
4. この戦いは、まだまだ続く。

パート II. 旧約時代

10 章 カナン定住と士師記の時代

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。
 - (1) この葛藤は、創世記 3 章以来続いているものである。
 - (2) この葛藤は、黙示録 20～21 章で終わる。
2. パート I. 葛藤の舞台設定 (1～3 章)
 - (1) 神は、人類を臣民とする神の国を造ろうとされた。
 - (2) サタンは、悪魔の国を作り、自らが王になろうとした。
 - (3) 神は、創世記 3 章 15 節で対抗策を啓示された (原福音)。
3. パート II. 旧約時代 (4～17 章)
 - 4 章 カインとアベル
 - 5 章 大洪水
 - 6 章 バベルの塔
 - 7 章 アブラハム契約
 - ①この契約は、無条件契約である。
 - ②契約の民イスラエルは、カナンの地で神の栄光を表わすことを期待された。
 - 8 章 出エジプト
 - 9 章 律法と幕屋
 - 10 章 カナン定住と士師記の時代
4. アウトライン
 - (1) 信仰による勝利
 - (2) 悪魔の反撃
 - (3) レビ人の町々
 - (4) 士師記のサイクル

士師記の時代に起きた神の国と悪魔の国の葛藤について学ぶ。

I. 信仰による勝利

1. カナン入国に際しては、民に対する神の守りが顕著な形で現れた。
 - (1) ヨシュアのリーダーシップの証明
 - ①民は、乾いた地を進むようにヨルダン川を渡ることができた。
 - * 川の水が上流でせき止められたからである。

②これは、民が紅海を渡ったことに対応している。

＊紅海の水が2つに割れた。

③紅海の奇跡では、モーセのリーダーシップが証明された。

④ヨルダン川の奇跡では、ヨシュアのリーダーシップが証明された。

(2) 要塞の町エリコの征服

①エリコは、高い城壁を擁する町であった。

②思案していたヨシュアの前に、【主】の軍の将（受肉前のメシア）が現れた。

③抜き身の剣を持ったその人は、ヨシュアに命じた。

Jos 5:15 【主】の軍の将はヨシュアに言った。「あなたの足の履き物を脱げ。あなたの立っている所は聖なる場所である。」そこで、ヨシュアはそうにした。

④民は、【主】の助けによってエリコを征服することができた（ヨシ6章）。

＊契約の箱を担ぎ、6日間町の周りを回った。

＊7日目には7周し、ときを声を上げた。

⑤この戦いは、【主】の戦いであった。

II. 悪魔の反撃

1. エリコを征服した直後に、悪魔の反撃が始まった。

(1) 悪魔は、アカンを誘惑した。

Jos 6:17 この町とそこにあるすべてのものは【主】のために聖絶せよ。遊女ラハブと、その家にもにいる者たちだけは、みな生かしておけ。彼女は私たちが送った使いたちをかくまってくれたからだ。

Jos 6:18 あなたがたは聖絶の物には手を出すな。あなたがた自身が聖絶されないようにするため、すなわち、聖絶の物の一部を取ってイスラエルの宿営を聖絶の物とし、これにわざわざいをもたらさないようにするためである。

Jos 6:19 ただし、銀や金、および青銅や鉄の器はすべて【主】のために聖別されたものである。それらは【主】の宝物倉に入れよ。」

①アカンは、この命令に背いた。その背後には、悪魔の誘惑があった。

(2) アカン個人の罪は、共同体全体の罪と見なされた。

①その結果、次のアイの戦いでは、イスラエルの民は敗北を喫した。

②悪魔は、アカンを起点に、不従順の罪が民全体に広がることを期待した。

④しかし神は、その可能性を初期の段階で阻止された。

⑤アカンとその一家は、石打の刑で処刑された。

2. 悪魔は、ギブオン人たちを利用した。

- (1) イスラエルの民は、ギブオン人と契約を結んだ。
 - ①神は、カナン人を滅ぼすように命じておられた。
 - ②ギブオン人は、遠国から来たかのように偽装し、イスラエルと契約を結んだ。
 - * 古びた袋、古いはきもの、古びた着物など
 - ③民は、【主】にお伺いを立てることなしにギブオン人と契約を結んだ。
 - ④偶像礼拝の民ギブオン人が、契約の民の間に住むことを許された。

III. レビ人の町々

1. カナンの地は、12 部族に分割された。

- (1) カナンの地には未征服の地域や都市国家が残されていた。
 - ①それらの地域を征服する責任は、各部族に委ねられた。

2. 神は、48 のレビ人の町々を国中に設置するように命じられた。

- (1) レビ族の相続地は、【主】ご自身である。
 - ①生活のために、レビ人の町々が設けられた。
 - ②国中に配置されたレビ人たちは、民衆に律法を教えた。
 - ③これは、霊的墮落からイスラエルの民を守るための神の方法である。
 - ④かつてのレビ人の使命は、幕屋の維持と移動のための奉仕であった。
 - ⑤定住生活に入ってから、その使命の内容が大きく変化した。

IV. 士師記のサイクル

1. ヨシュアの死後

- (1) 民は、悪魔の攻撃を受けやすい状態に置かれた。
 - ①その結果、背教と無政府状態が約 350 年続くことになる。

Jdg 21:25 そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。

- ②モーセの律法よりも、人間的な判断が優先されたということである。

2. 悪魔は、3 つの方法で神の計画に挑戦した。

- (1) 民は、カナンの地征服のための戦いを途中で放棄した。
 - ①これは、将来に禍根を残した。
- (2) 民は、カナン人の宗教の影響を受けた。
 - ①バアルとアシュタロテ礼拝を採用した。
- (3) 民は、カナン人と結婚するようになった。

Jdg 3:5 イスラエル人は、カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のただ中に住み、

Jdg 3:6 彼らの娘を自分たちの妻とし、また自分たちの娘を彼らの息子に与えて、彼らの神々に仕えた。

3. 神と悪魔の葛藤は、士師記のサイクルとして現れた。

(1) 民は、霊的、道徳的に墮落する。

- ①民は、バアル礼拝に取り込まれて行った。
- ②「バアル」とは、当時カナンの地で広く礼拝されていた豊穡神である。
- ③「バアル」には、主人という意味があるが、それが農業神の称号となった。
- ④バアルは、毎年一度死んで生き返ると考えられていた。
- ⑤バアルの復活を促進するために、神殿娼婦との交わりが実行された。
- ⑥遊牧生活しか知らなかった民にとって、バアル崇拜は大きな誘惑となった。
- ⑦「アシュタロテ」は、バアルの妻で、豊穡、戦争、愛を司る女神であった。

(2) 民の墮落を止めるために、神の裁きが下る。

- ①神は、裁きの器として外敵を起こされた。
- ②外敵となったのは、イスラエルの民が追放しなかったカナン人たちである。
- ③悪魔は、背教が民全体に広がることを期待したが、そうはならなかった。
- ④その都度、神は介入された。
- ⑤そのため、士師記の時代の背教と墮落は、常にローカルな範囲にとどまった。

(3) 民は、神に立ち返る。

- ①外敵の攻撃が激しくなると、民は悔い改め、神の助けを求めた。

Jdg 6:6 こうして、イスラエルはミディアン人の前で非常に弱くなった。すると、イスラエルの子らは【主】に叫び求めた。

- ②外敵の攻撃は、民を神のもとに連れ戻すための神の方法であった。
- ③民は、無条件にカナンの地を相続したのではない。
- ④その地の相続には、モーセの律法に従って生きるという責務が伴っていた。
- ⑤律法に忠実に生きるなら、その地にあって繁栄を経験することができる。
- ⑥しかし、律法から外れるなら、苦境に陥ることになる。

(4) 神は、解放者を起こされる。

- ①民の祈りに応え、神は解放者を起こされた。
- ②この解放者が、士師と呼ばれる人たちである。
- ③士師は、ヘブル語で「ショフェット」、英語で「judge」「deliverer」である。

＊裁判官、政治的・軍事的指導者、外敵から民を救う解放者

④士師記には、12 人の士師たちが登場する。

まとめ

1. 神は、イスラエルの民がカナンの地で神の栄光を表わすことを期待された。
2. 悪魔は、地域的な背教が民全体に広がることを画策した。
3. 神は、背教が民全体に広がらないように阻止された。
4. 士師記のサイクルは、悪魔の陰謀がその都度阻止されたことを示している。